

Friday >>> さいたま

よみくり文芸

短歌 渡 英子 選

【秀逸】
回覧板夜に来たるらし朝露を載せるポストの啞えてお
りぬ
所沢市 鈴木 興山

(評) 郵便受けに入りきらない回覧板をはさんでおいた隣人。日中に届けられず夜のポストに入れたのだろう。そのお蔭で歌が生まれた。下三句の描写が卓抜。

【佳作】
子供に還る白寿の母を見舞いたり此の子は曾孫、僕は
息子だ
朝霞市 鴨下 素石

(評) 白寿は九十九歳。百歳になんなんとする母に曾孫を見せに訪れたのだろう。曾孫は「こもかく」僕は息子だ」の結句にペーソスが漂う現代の母と子の歌だ。

【入選】
黒ぶどう陽にかがやきて熱れゆかば甲斐に雪ふる日は
近からむ
所沢市 黒川 秋夫
身の丈を越える荷を背負い山小屋に向かう歩荷が霧に
包まる
中央区 黛 衛和
ねずみといふ文字は今も残りをり山車を曳きゆく大嵐
ら子慮ら
深谷市 平井 守
天井の蛍光灯をつけ替へるばあさんを見上ぐる夫
宮代町 古田 敏子
名を呼べば街道筋が眼に浮かぶ草加越谷幸手栗橋

南區 桜井 英雄
掃蕩する特急あじあになつかしと曠野の夕陽をじつと
見つめき
秩父市 内田 定男
水引きてあらわに出づる真菰の根ふとぶととしてたく
ましく見ゆ
越谷市 田中 弘之
駆けこみし電車の席で気付きたりズボンの膝に白し飯
粒
坂戸市 比留間まこと

俳句 辻 桃子 選

【秀逸】
浦芝居海女の哀話に海女が泣き
富士見市 加藤ただし

(評) 浦芝居は、浦祭の折に上演される地芝居のことだろう。海女がすぐそこに聞こえるところに作られた舞台だ。海女が登場する悲しい芝居に見物の海女が涙を流したという。古来海女が主人公の能や歌舞伎はどれも悲恋の物語だ。

【佳作】
教え子に敬語使いて夜学かな 春日部市 相沢 明子

(評) 昔は経済的な理由で夜学に通う生徒が多かったが、現在では特定の目的のために学んだり学び直したりするために通う生徒が増えている。教師より年上の教え子なのだろう。敬意をもって接している。夜学ならではの景だ。

【入選】
鶺鴒音鉄の籠巻く御神木 熊谷市 田島 良生
利根川の見ゆる刈田となりけり
吉川市 人見 正
服薬の供や夜長の秩父船 秩父市 山口 富江
掘り掛けのまま学校の蔭畑 緑区 倉林 隆

益東風や軒先で売る焼たんご 富士見市 阿部 泰夫
秋桜や濃いも薄いもやはらかく 狭山市 小俣 敦美
歯の治療すみ路地裏に虫の声 北区 石井 太子
今日は西ゆうべは北にいなびかり 川口市 広田 絹子

川柳 西潟賢一郎 選

【秀逸】
振り向かず温い言葉を抱きしめる
志木市 増田喜代子

(評) 何気ない言葉の慰め誘りのそのどちらも孤独の身には刺激だが、背を撫でる台詞の視線の先には励ましの顔が人生と呼ぶ舞台へと導いてくれる。

【佳作】
人生に後戻りは無い進むだけ 小川町 島田 伊正

(評) 夢を追いかけて突き進む自分を時に自慢し誉めてやりたいくなるが、それも分限を超えない誠意があればこそ猪武者にならない生き方こそ肝要。

【入選】
おだまりと一喝してる遺言書 鴻巣市 小林 正佳

この俺に似ている様な昼の月 狭山市 松井 永世
辻褄が合わぬ会話に日々の幸 北区 秋山 和希
どっこいしょこの口癖に支えられ 熊谷市 根岸 芳功
幼な児に生きる意味合い授かりぬ 川口市 田口 公江
老いの身は出欠席に悩みます 坂戸市 本田 茂子
地場産で季節先取り道の駅 幸手市 白石 清恵
食事待つこの楽しみを噛みしめる 所沢市 岡本詔一郎

【おまけ】
2日の「よみくり文芸」俳句秀逸「新涼や鉄棒の鉄
欄みては」は過去に類似作があるため、秀逸を取り
消します。